

小笠原（おがさわら）諸島の概要

小笠原諸島（別名：ボニンアイランド）は、東京（とうきょう）から南に約 1,000 キロメートル離れた、浮かぶ約 30 からなる火山性の島々である。地理的に孤立したこの島々は多くの固有種の生息地となっており、周辺的大海原はクジラやイルカ、アオウミガメの楽園となっている。1972 年、小笠原諸島は国立公園となり、2011 年にはユネスコの世界自然遺産に指定された。

小笠原諸島は、自然を愛する人にとって憧れの場所である。主島である父島（ちちじま）と母島（ははじま）の 2 つの島の森の中には散策路が通っており、道を曲がるたびにほぼ毎回、夏にアオウミガメが産卵のためにやってくるビーチを見渡すことができる。ザトウクジラがブリーチング（大ジャンプ）や、潜っていくマッコウクジラが尾ヒレを見せることがある。島固有の鳥が森を飛び回り、夜にはオオコウモリが空を舞う。

長い歴史の中で、多くの異なる集団が島に定住し、それぞれの文化の習慣や影響をもたらし、独自の文化的モザイクが生み出された。この諸島に最初に定住したのは欧米人とハワイ人、ポリネシア人の集団であった。彼らは、太平洋で捕鯨を行う多くの捕鯨船向けに交易所を作るため 1830 年にやって来た。日本人はその後に来た。このように様々な人々が混じり合う中で発達した言語と習慣の独特の融合は、他の場所では見ることができない。

この諸島は少なくとも 16 世紀以来、多くの名前でも知られてきた。通りかかる船によって何度も「発見」され、そのたびに別の名前が付けられたためである。1543 年にはスペイン人がその存在を知り、1670 年にはすでに日本の役人も知っていた。1675 年には徳川幕府が島の正式な調査を行い、これを日本の領土とする宣言をしたが、正式に併合したのは 1876 年のことである。「小笠原」という名前は、1593 年に小笠原貞頼（生没年不詳）が初めてこの島を発見したという 18 世紀の主張に由来している。この主張を裏付ける確固たる証拠はないものの、そのまま小笠原という名前が残った。「ボニン」という別の名前は、かつての日本地図にこの諸島が漢字で記されており、人の住んでいないことを意味する「ぶにん（無人）」と読めることに由来している。